

休憩後も終演後も拍手喝采とブラヴォーを浴び続けた指揮者ベトレンコが今夜の主役であった。(5月22日所見)

(中東生)



カウフマン(右)がヴァルターを演じて話題となったバイエルン州立歌劇場の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》
©Wilfried Hoel

CONCERT 2月~7月

コンサート、イベントから

EVENT

Opera バイエルン州立歌劇場《ニュルンベルクのマイスタージンガー》

このオペラは、ドイツ人にとって苦い過去を思い出させる特別な存在であるが、このデイヴィッド・ボッシュの新演出は彼らにとっても楽しめる、ある意味反ドイツ的な舞台であったと言える。キリル・ベトレンコが指揮する「序曲」も英雄的というよりリリックで、輝かしいが柔らかに優しい音色を駆使し、ロマンティックで斬新なアプローチだった。

そこへ登場する、革ジャンパーにギターケースを抱えたヴァルター・フォン・シユトルツィングを演じるヨナス・カウフマンが、斜に構えた仕草で保守的なギルドと渡り合う。その問題児が、だんだんと歌合戦を真面目に受け止めるようになり、〈朝はばら色に輝き〉の Aria では、冒頭は神秘的なレガートが足りなかったものの、最後には清々しい満足感に達した。エーファ役のサラ・ヤクビャクは可憐な容姿と特別な色を持つ声で適役だった。

バックメッサー役のマルクス・アイヒェは嫌味な性格とエーファへの真の愛を上手く両立させ、深みのある人間像を描き出していたので、ガソリンをかぶって焼身自殺しようとした時も、最後にピストルをくわえて自殺した時も心が痛んだ。ハンス・ザックス役のヴォルフガンク・コッホは、今まで様々な役で注目してきたが、残念ながら今回は荷が重過ぎたようだ。軽く歌うと体の支えが抜けてしまうのだが、そうして声を休ませてやっと最後まで歌い切れたようだ。